

研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所 京都市下京区中堂寺命婦町1-10  
 京都産業大学むすびわざ館内(3・4階)  
 管理機関名 京都府教育委員会  
 代表者名 教育長 橋本 幸三 印

平成30年度スーパーグローバルハイスクールに係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

記

1 事業の実施期間

平成30年4月2日(契約締結日)～平成31年3月29日

2 指定校名

学校名 京都府立嵯峨野高等学校  
 学校長名 小川 雅史

3 研究開発名

地域連携・海外コラボ型「京都グローバルスタディーズ」によるリーダー育成

4 研究開発概要

地域連携・海外コラボ型「京都グローバルスタディーズ(以下、KGS)ⅠⅡⅢ(3学年)」で扱う内容は、1年次のKGSⅠでは、基礎的な探究活動を行い、「課題設定・解決能力」「英語・異文化コミュニケーション能力」の基礎を築き、2年次のKGSⅡでは、「環境」と「地域」を2本の柱として「人文科学・社会科学・自然科学」分野において、アカデミックラボで課題研究を行い、探究する力、表現する力、課題設定・解決能力、地球規模で考える力を高めるものとした。3年次KGSⅢでは、本校主催で英語による課題研究発表会「SAGANO GLOBAL PRESENTATION」(府内高校・全国グローバルハイスクール(以下、SGH)指定校・海外のパートナー校が対象)を実施し、研究課題を英語で発表し、質疑応答をすることで、課題研究を深める機会とした。その間、京都大学、大阪大学をはじめとする関係機関との連携や海外交流校との国際ワークショップを有機的に図り、研究開発を推進した。

5 管理機関の取組・支援実績

(1) 実施日程

業務項目	実施日程(月)											
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
スーパーサイエンスネットワーク京都事業 ・サイエンスフェスタ	→											
グローバルネットワーク京都事業 ・HLABコラボレーションプログラム	→											
府立高校生 グローバルチャレンジ事業 ・説明会・オリエンテーション ・エディンバラ語学研修 ・オーストラリア語学研修 ・短期留学チャレンジ			■	■	→	→	→					
府立高校海外サテライト校事業 ・オーストラリア留学 ・アメリカ留学					→	→	→	→	→	→	→	→
SGH推進委員会 運営指導委員会	→											

## (2) 実績の説明

スーパーサイエンスネットワーク京都事業は、独創的な科学研究により世界をリードできる人材の育成を目指し、平成25年度から京都府教育委員会が独自に実施している事業である。府立高校47校のうち9校が指定され、嵯峨野高校は、その幹事校として事業の牽引役を担っている。指定校生徒が課題研究の成果を発表し合う合同研究発表会「京都サイエンスフェスタ」（参加者延べ1,500名規模、年2回開催）において、嵯峨野高校は、幹事校としてその成果を積極的に他の指定校に広めている。嵯峨野高校からは合計258名（1年生170名、2年生82名、3年生6名）が参加した。

また、京都府教育委員会はグローバル人材育成を目指したグローバルネットワーク京都事業も実施しており、府立高校を9校指定している。嵯峨野高校は、HLABコラボレーションプログラムへの参加をグローバルネットワーク京都校に呼びかけ他校の生徒にもSGHの成果を波及させている。

また、京都府が実施している府立高校生グローバルチャレンジ事業において、嵯峨野高校からはエディンバラ語学研修に1年生1名及び2年生6名、オーストラリア語学研修に1年生11名及び2年生2名、短期留学チャレンジに2年生1名を派遣した。エディンバラ語学研修では、夏季休業期間に、主にエディンバラ・カレッジ（サイトヒルズキャンパス）を研修場所とし週20時間の英語レッスンを実施した。

オーストラリア語学研修では、夏季休業期間に、アデレード郊外の公立の中等教育学校で8回の英語レッスンと受け入れ校生徒たちとの交流会を実施した。短期留学チャレンジは、留学先を生徒自らが探し出し、海外留学にチャレンジすることを支援するものであり、嵯峨野高校からは夏季休業期間にフィリピンに生徒を派遣した。

さらに府立高校海外サテライト校事業では嵯峨野高校から2年生1名をアメリカ合衆国に、2年生4名と1年生3名をオーストラリアに派遣した。これは4ヶ月程度の中期留学を行うものであり、8月から12月下旬または1月下旬から4月上旬にかけて現地の公立の中等教育学校で現地の生徒と同じ授業を受けた。

これらの海外での語学研修において、より高い語学力・コミュニケーション能力を身に付けさせるとともに、国際感覚を育み、異文化理解を体感させることで、グローバル人材の育成を支援した。

研究計画の作成や教育課程の編成においては、指導主事等が指導・助言を行い、SGH事業の有効な運用に向け支援を行ってきた。

また、運営指導委員会において、学識経験者の委員からの指導とともに、教育委員会からも、研究開発の取組内容に関する指導・助言を行った。

なお、年間を通してSGHの対象となった生徒数は計722名（1年生240名、2年生243名、3年生239名）である。

## 6 研究開発の実績

### (1) 実施日程

業務項目	実施日程																	
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月						
①KGSⅠⅡⅢ 「情報の科学」 「グローバルインタラクション」 「ロジカルサイエンス」 「アカデミックラボ」 「課題錬成A・B」													→	→	→	→	→	→
②国際ワークショップ	→		→					→	→									
③海外トップ大学の学生とのワークショップ							→											
④グローバルフィールドワーク							→											
⑤アカデミックラボ課題研究発表会																		→
⑥SAGANO GLOBAL PRESENTATION 成果発表会		→	→															
⑦評価 ・SGH推進委員会 ・運営指導委員会																		→

### (2) 実績の説明

#### (A) 研究開発単位「KGSⅠⅡⅢ」

##### ア 学校設定科目「グローバルインタラクション」

対象 1年生普通科・京都こすもす科（共修） 239人

- ① 日々の授業で、生徒の英語によるコミュニケーション活動を最大限持つように授業展開している。All English の授業とPerformance Task、京都の大学に学ぶ外国人留学生をTeaching Assistant（以下、TA）として活用し、授業内でのコミュニケーション活動の機会と時間をできるだけ多く取り、英語でのプレゼンテーション（スライド・ポスター）やディスカッションに必要な論理的コミュニケ

ーション能力を高めることを目指した。

Performance taskを通して、英語の4技能のうち、特に「英語を聞く力」について87%の生徒が、「非常に高まった」「ある程度高まった」という肯定的な回答をしており、「英語を話す力」「英語を書く力」についても、それぞれ87%、76%の高い割合の生徒が肯定的な回答をしている。これらの成果の普及を図るため、グローバルインタラクシオンの教材を英語で本校ホームページに掲載した。

研究指定後も該当教材を改善し、日英両言語で公開し英語の4技能育成に貢献していく予定である。

## ② 国際ワークショップ

5月31日(木)・6月1日(金)	シンガポール共和国	ハイシンカトリックスクール生と授業交流等
6月8日(金)～18日(月)	アメリカ合衆国	ジュピターハイスクール生と授業交流等
10月16日(火)	大韓民国	韓一高校生と授業交流
11月12日(月)	シンガポール共和国	イーシュンタウンセカンダリースクール生と授業交流
11月13日(火)	シンガポール共和国	ナンチアウハイスクール生と授業交流
11月21日(水)～23日(金)	シンガポール共和国	アングロチャイニーズスクール生と授業交流

## イ 情報の科学

対象 1年生全クラス 319人

### ① 4月～11月

ICT関連の技術・手法を学び、今後の課題探究学習に必要な文書作成、データ処理の方法や資料作成の方法(パワーポイント等)を学んだ。また、自分が読んだ本の内容を紹介する文書を作成し、ビブリオバトルを行った。

### ② 12月～3月

課題探究基礎を12月から開始。この課題研究の最終目標は、SDGs(持続可能な開発目標)の17の目標の内、いずれか1つについてグループで問題を発見し、課題を設定して、仮説を立てることである。

まず、SDGsの17の目標のうち、関心をもった事柄について調べたことをまとめ、自分の考えを記述させることによって、生徒に課題意識を持たせた(夏季休業中の課題)。2学期後半からはグループ活動を実施し、グループでまとめた内容について、クラス内で発表会を実施。年度末には、「情報の科学」合同発表会を実施して各クラスの代表1グループが発表を行った。ここで学んだ「課題探究基礎」の手法を2年次のアカデミックラボにつなげる。

## ウ アカデミックラボについて

対象 2年生普通科・京都こすもす科(共修) 243人

### ① 平成30年度アカデミックラボ

4～12月 課題探究学習(中間発表会は各ラボで)

1～2月 ポスター発表準備

2～3月 校内発表会、外部での発表会等へ

来年度6月 課題研究発表会-SAGANO GLOBAL PRESENTATION-で研究内容を英語で口頭発表

### ② 課題探究学習を始めるにあたって

京都大学博物館 塩瀬隆之准教授による講演会(4月23日(月))を実施。各ラボで課題探究学習を始めるにあたって、「課題探究学習にかかる講演会」として講演をいただいた。生徒にも教員にも指針となる講演であった。

### ③ アカデミックラボについて

#### 平成30年度開講アカデミックラボ教科別担当講座

国語科担当ラボ(3講座)、数学科担当ラボ(2講座)、地歴公民科担当ラボ(3講座(うち1講座は英語科と共催))、理科担当ラボ(3講座)、英語科担当ラボ(3講座(うち1講座は地歴公民科と共催))、家庭科担当ラボ(1講座)、芸術科担当ラボ(2講座)、保健体育科担当ラボ(1講座)

アカデミックラボでは、生徒全員が各ラボ(研究グループ)に所属して、課題研究に取り組んだ。各ラボでは、テーマ決定や中間発表の際にチームでディスカッションすることを大切にしている。

<主な連携先>

京都大学、大阪大学、京都教育大学、立命館大学、関西大学、京都市立芸術大学、京都嵯峨芸術大学、京都学園大学、京都弁護士会法教育委員会、日本政策金融公庫、嵐山保勝会等

### ④ アカデミックラボ課題研究発表会

平成31年2月8日(金)に本校で実施した。京都こすもす科共修コース及び普通科生徒243名が、59グループに分かれてポスター発表した。ポスター発表については、1回あたり説明6分・質疑応答5分の11分で構成し、計6回実施した。第1学年生徒(240名)と高校・大学関係者18名、及び保護者32名が見学した。

### ⑤ 校内での協議・共有・深化に向けて(平成25年度～平成30年度までの流れ)

#### <平成25年度9月～3月>アカデミックラボのフレームの検討

- アカデミックラボの内容を検討するため、ワーキングチームを立ち上げた。メンバーについては、校内で参加を募り、10回の会議を開催した。

- 平成26年度入学生からの新教育システム（京都こすもす科・普通科）の導入にあたって、全校で課題探究学習に取り組むこととし、京都こすもす科自然科学系統専修コースは「スーパーサイエンスラボ」、京都こすもす科共修コース及び普通科は「アカデミックラボ」とし、全校生徒が課題探究学習に取り組むこととした。
- アカデミックラボについては、生徒は「人文科学、社会科学、国際関係、自然科学」の4つの領域の中から興味関心に応じてラボを選択することを確認した。

### ＜平成26年度＞アカデミックラボの体制・内容の検討

- アカデミックラボの内容の検討にあつては、教科主任会を中心に行い、各教科で検討を重ね、16ラボを開講することとした。国語科、地歴公民科、数学科、理科、芸術科、家庭科、英語科の教員が担当することとした。また、アカデミックラボの内容の共有のため、教員研修会で確認をした。
- 9月には、生徒への説明をし、生徒の希望に従って各ラボのメンバーを決定した。

### ＜平成27年度4月～平成28年度3月＞アカデミックラボの実施・共有化・深化

- ラボの運営を校内全体で進めることができるように、ラボ担当者会議、教科主任会や職員会議で内容の検討及び周知を図ってきた。平成27年度、ラボ担当者会議は8回、教科主任会では6回、平成28年度、ラボ担当者会議は10回実施し、情報を共有して内容や研究の進め方、評価等について話し合いを重ねた。2月の課題研究発表会には、2年担任団も評価に加わった。
- 平成28年度からラボに保健体育科も参加することとなり、全教科でラボを担当することとなった。
- 平成27年度から28年度の間、評価方法について研究・協議をし、作成したルーブリック評価方法をアカデミックラボで講評者が使用した。課題研究のルーブリック評価を各ラボ担当者が試行し、その内容を担当者会議で共有した。平成28年度には、全ラボ共通の評価の軸の作成を試行し、課題研究の進捗状況をチェックするシートを使用して生徒へのフィードバックを行った。
- 平成28年2月 アカデミックラボ課題研究発表会（第1回）を実施
- 平成28年3月 総括会議を実施、職員会議で共有した。
- 平成28年6月 「英語による課題研究発表会-SAGANO GLOBAL PRESENTATION-」開催
- 平成29年2月 アカデミックラボ課題研究発表会（第2回）を実施
- 平成29年3月 アカデミックラボ担当者会議を実施し、当該年度の課題研究やその評価について総括し、職員会議で共有した。

### ＜平成29年度4月～平成30年度3月＞アカデミックラボの充実と成果の検証・波及

- 平成29年4月 当該年度の活動を始めるにあたり、アカデミックラボ担当者会議を実施して、活動の概要、これまでの流れ、成果と課題などについて共通理解を図った。
- 4月のラボ開講時に京都大学総合博物館 准教授 塩瀬 隆之氏講演会（平成29年4月25日(火)）を実施。生徒及びラボ担当者以外にも多くの教職員が参加。
- 平成29年5月 アカデミックラボ担当者会議を実施し、「英語による課題研究発表会-SAGANO GLOBAL PRESENTATION-」に向けた打合せと、今年度のラボ活動の具体的な進め方等について確認を行った。
- 平成29年6月 「英語による課題研究発表会-SAGANO GLOBAL PRESENTATION-」第2回開催
- 平成29年7月 アカデミックラボ担当者会議を実施し、1学期の評価に関する確認と活動のまとめを行った。
- 平成30年2月 アカデミックラボ課題研究発表会（第3回）を開催  
京都大学大学院教育学研究科 楠見 孝教授、西岡 加名恵教授と今後の活動・評価の深化について協議
- 平成30年3月 アカデミックラボ担当者会議を実施し、課題研究やその評価について総括し、職員会議で共有した。
- 平成30年4月 当該年度の活動を始めるにあたり、アカデミックラボ担当者会議を実施して、活動の概要、これまでの流れ、成果と課題などについて共通理解を図った。
- 4月のラボ開講時に京都大学総合博物館 准教授 塩瀬 隆之氏講演会（平成30年4月23日(月)）を実施。生徒及びラボ担当者以外にも多くの教職員が参加。
- 平成30年6月 「英語による課題研究発表会-SAGANO GLOBAL PRESENTATION-」（第3回）開催
- 平成30年7月 アカデミックラボ担当者会議を実施し、1学期の評価に関する確認と活動のまとめを行った。
- 平成31年2月 アカデミックラボ課題研究発表会（第4回）を開催
- 平成31年3月 アカデミックラボ担当者会議を実施し、SGHの取組を行った5年間の評価について総括した。

## ⑥ 成果と課題

### <成果>

- 1 生徒独自の視点での課題研究、真剣な取組姿勢⇒「総合的な探究の時間」への移行
- 2 S G H対象3年生全員(約240名)の英語発表⇒英語による発表・提言活動のカリキュラム化
- 3 課題研究の指導体制の確立⇒課題研究の指導法の改善・開発
- 4 下級生への波及効果と刺激⇒嵯峨野の新しい伝統
- 5 生徒・教員の変容や教育効果を調査⇒卒業生対象アンケート等(S G H対象第1・2期生)
- 6 海外交流校との関係の深まり⇒国際化の促進
- 7 生徒の海外交流経験の促進と留学者数の増加⇒国際化の促進

### <課題>

- 1 課題研究の内容の深み
- 2 英語での質疑応答力
- 3 生徒・教員の変容や教育効果を可視化⇒卒業生へのアンケート調査
- 4 課題研究及びS G Hの取組の評価
- 5 課題研究以外の教育活動への波及・他校への普及
- 6 S G Hの取組と大学進学との関連
- 7 ポストS G Hについての対処

- 1 「課題探究の進め方」については、各ラボとも大学・企業・地域との連携がさらに深まり、これまでの経験(探究の進め方・発表会に向けての準備・I C T機器の使用等)を活かして探究活動が積極的に進められるようになってきている。また、「生徒・教員の変容の可視化」については、従来のアンケート(嵯峨野高校作成・京都大学作成)結果の分析に加えて、ビデオ等を活用した全生徒の発表の記録を通してその変容の可視化を図っている。京都大学の楠見孝教授の分析においても、探究活動には一定の成果が見られている。
- 2 評価方法についても、5年間の研究を通して一定の成果を得た。研究指定後も評価方法について改善を進め、広く普及を図る。
- 3 「S G H事業」における「学び」の「波及」や「普及」については、成果発表会や国際ワークショップの実施を通して成果を上げてきた。研究指定後もK G S I I Iで行ってきた学びを、学校全体の教育活動とさらに有機的に繋げていき本校独自の教育活動として定着させるとともに、近隣の小・中学校等にも成果を伝えていく。

## (B) 課題設定・解決力や国際的教養を身に付けたグローバルリーダーの育成を図る指導方法の研究 ア 国際ワークショップ

海外の同世代の高校生徒との交流を通して、多様な考え方に触れ、地球規模の視野で考える力をつけるため、国際ワークショップを行った。「持続可能な社会の形成、環境、地域の諸課題」について取り組み、国際チームで同一課題に向けて取り組むことで、国際舞台で通用する異文化コミュニケーション力やリーダーシップをとる力を生徒が身につけることを目的とした。

課題研究に取り組み、国際チームで言語の壁や異文化の壁を越える体験とするため、海外のパートナー校へ訪問を行い、持続可能な社会の形成、環境や地域の諸課題についてフィールドワーク(以下、F W)、ディスカッション、グループワークを行った。

海外研修参加者は、始業式等で全校生徒への報告を行い、学校祭においても、本校生、外国人留学生や教育関係者を対象に、英語でポスター発表と質疑応答を行った。

「手作りの相互交流」「同世代の若者との交流」「ミニ課題研究の成果発表」「報告会の実施」「I C Tの積極的活用」を重視しており、「持続可能な社会形成(E S Dの理念)」と「未来デザインの提案」といったテーマ設定が特徴となっている。

### ① 校内

I	5月31日(木)・6月1日(金)	シンガポール共和国	ハイシンカトリックスクール生と授業交流等
II	6月8日(金)~18日(月)	アメリカ合衆国	ジュピターハイスクール生と授業交流等
III	10月16日(火)	大韓民国	韓一高校生と授業交流
IV	11月12日(月)	シンガポール共和国	イーシュンタウンセカンダリースクール生と授業交流
V	11月13日(火)	シンガポール共和国	ナンチアウハイスクール生と授業交流
VI	11月21日(水)~23日(金)	シンガポール共和国	アングロチャイニーズスクール生と授業交流

### ② 海外

#### <趣 旨>

グローバル社会の将来のリーダーとして活躍するために必要なコミュニケーションへの積極性、英語・異文化コミュニケーション力及び課題設定・解決能力を養うことを目的とする。

#### I アメリカ・フロリダ研修

<日 時>平成31年1月4日(金)~1月14日(月)

<参加者>嵯峨野高校生 6名

<場 所>

アメリカ合衆国フロリダ州内の各地：ジュピター市文化環境関連施設、ジュピター高校、フロリダアトランティック大学、エバーグレーズ国立公園、モリカミュージアム他

<内 容>

ジュピター市における歴史・文化・環境FW、ジュピター高校における授業参加・プレゼンテーション発表、エバーグレーズ国立公園での合同FW、モリカミュージアムでのプレゼンテーション発表、歴史・文化FWを行った。

## Ⅱ カナダ・ケベック研修（昨年度実績）

<日 時> 平成30年3月18日（日）～3月26日（月）

<参加者> 嵯峨野高校生 4名

<場 所> カナダ・ケベック州

<内 容>

ロシュベル高校（IBスクール）コレージュ・ド・コンパグノンでの合同授業と生徒交流、環境（森林等）関連施設で環境（モデルフォレスト運動、エネルギー他）研修（ラバール大学）、モンリオール市役所、在モンリオール日本国総領事館等の日本及びカナダ政府関係機関表敬訪問

## Ⅲ S G H海外研修の事後報告等について

・始業式後、全校生徒にケベック研修報告（平成30年4月9日（月））

・中期留学（アメリカ、オーストラリア）をしていた3名の生徒が全校生徒を前に報告（平成31年1月7日（月））

## Ⅳ 海外トップ大学の学生とのワークショップ（課題研究）について

### HLAB サマースクールと嵯峨野高校とのコラボ・ワークショップ

グローバルリーダーの資質を育むため、嵯峨野高校生をはじめとする京都府立高校生が、ハーバード大学をはじめとする海外トップ大学の学生や日本の大学で学ぶ日英バイリンガルの学生と共に、祇園・四条河原町・嵐山などの地域の美しい自然や環境、歴史・伝統・文化についてFW等を通して探究した。加えて、国際チームを編成して京都の持続可能な発展に関する共通の課題についてディスカッションや発表を行うなどの海外での大学の学びを通して、課題研究の手法を学んだ。海外大学の学生と交流することで、国際的なキャリアへ進む方法などを知り、グローバルな社会で活躍するための資質を育むこととした。

<日 時>平成30年8月25日（土）・26日（日）

<参加者>嵯峨野高校生15名、グローバルネットワーク京都校の生徒6名 HLAB関係者7名

<内 容>事前FW、ディスカッション、日本文化体験、FW、プレゼンテーション

※グローバルネットワーク京都校：山城高校・鳥羽高校・洛西高校・東宇治高校・  
菟道高校・城南菱創高校・西城陽高校・園部高校・峰山高校（内4校が参加）

<テーマ>『外国人のための京都観光の質を高める方策』

（各グループは、異なるFW先へ行った高校生（5名）と海外大学生（1名）と日本人バイリンガル学生（1名）で編成）

## Ⅴ 京都ユネスコスクールのネットワークの取組

京都のユネスコスクール7校（嵯峨野高校、京田辺シュタイナー校、一燈園高校、平安女学院、京大西高校、紫野高校、西乙訓高校）のネットワーク「ユネスコASPnet京都」を創設。本年度は第3回目となるユネスコスクール交流会を開催。「日本の生活・文化で未来に伝えたいもの」をテーマに、講演、ワークショップ、ポスター発表等を行い、ESDに関する各校の取組を共有して生徒の学びを深める一日となった。

<日 時>平成30年10月28日（日）9:30-17:00

<場 所>上賀茂神社（世界遺産）

<参加者>ユネスコASPnet京都校生徒（約50名）

※本校からはグローバル環境ラボ2チームの生徒6名が参加

<内 容>

・上賀茂神社内FW及び上賀茂神社 乾 光孝氏による講演

・ディスカッション（テーマ「日本の生活・文化で未来に伝えたいもの」）

・ポスターセッション（各校の持続可能な発展に関する教育の取組の交流）等

## （C）地域の教育資源を活用した人材育成及び高大接続

### ア グローバルインタラクシオンにおけるTAの活用

#### ① 「グローバルインタラクシオン」におけるTAの活用

4月から、外国人留学生（立命館大学）をTAとして、「グローバルインタラクシオン」及び「アカデミックラボ」の授業に活用。今年度登録者は、9ヶ国から16名であった。

#### ② 「グローバルフィールドワーク」

##### I 社会科学FW（7月31日（火））を実施

京都地方裁判所大法廷を見学するとともに公判を傍聴した。また、京都弁護士会館にて模擬裁判の実践を行い、裁判員裁判を体験するとともに、「刑事裁判の原則」というテーマの講義を受講した。さら

に数人ずつのグループに分かれて法律事務所を訪問し、弁護士の職務等について聴き取り調査を行った。

## Ⅱ 人文科学FW（7月31日（火））を実施

仁和寺の歴史等について講話を聞き、「聞香体験」では香道や香木の歴史を学ぶとともに、香りの違いを聞き比べ、香木の香りを深く味わった。「茶席体験」では茶道の歴史や礼儀の意味等を教わった後、茶席体験を行って茶の湯の世界を体感した。「狂言ワークショップ」では専門家の指導の下、実際に狂言の動きを再現し、鑑賞だけでは得られない狂言の世界を経験した。また「仁和寺FW」では仁和寺内の建物を調査し、歴史的建造物に隠された意味について考えた。さらに「伝統文化ワークショップ」を行い、次年度のアカデミックラボに繋がる取組となった。

## Ⅲ 英語集中合宿（7月30日（月）・31日（火））を実施

2日間、オールイングリッシュで実施。インタースクールの講師による本格的な通訳の講習のほか、本校教諭や外国語指導助手（以下、ALT）による工夫を凝らしたワークショップやスキットコンテストを行った。

### ③ 「イングリッシュカフェ」

＜趣 旨＞

本校のTAとのディスカッションをすることで、視野を広げ、その経験を将来のグローバル人材育成への一助とすることを目的とした。英語でのディスカッションを楽しむとともに、TAから出身国の課題等についてパワーポイントを使用しているプレゼンテーションがあり、その後、参加者が質疑応答を英語で行った。今年度はそれに加えて、SGH事業による海外研修だけではなく、広く海外交流体験を生徒が語る場とし、多くの生徒が発表に参加し、さらに有意義な機会とすることができた。

＜日 時＞9月6日（木）文化祭2日目

＜参加者＞本校生徒138名、ALT2名、TA（外国人留学生）4名、保護者

### （D）グローバルリーダー育成に関する環境整備、教育課程外の取組

#### ア 海外勤務者帰国子女対象の特別入学者選抜について

平成27年度入試から、本校京都こすもす科において、海外勤務者帰国子女入学者選抜を導入している。異なる価値観を持つ生徒同士が互いに切磋琢磨する環境を整備したいと考える。平成31年度入学者選抜における出願資格は以下のとおりで、この選抜により3名が合格している。

＜募集定員＞ 京都こすもす科5名以内

＜出願資格＞ 公立高校の出願資格に該当する者であって、

I 海外勤務者（日本国籍を有する者で、海外に所在する機関、事務所等の勤務又は海外において研究・研修を行うことを目的として日本国を出国し、海外に在留していたもの又は現在なお在留しているもの）の子女であること。

II 外国において引き続き1年以上在留していたこと。

III 平成28年2月1日以降に帰国したこと。

#### イ 日本人としてのアイデンティティの確立を促すための取組

海外のパートナー校とのワークショップにおける日本文化についての説明や実際に日本文化にふれる機会を設定した。人文社会FWにおいて、茂山狂言会による狂言ワークショップを実施。また、実際の舞台上で、狂言に挑戦した。

## 7 目標の進捗状況、成果・評価

### （1）アカデミックラボについて

生徒アンケートにおいて、2年生はアカデミックラボで、「自分達で主体的に考え、課題を設定し、研究できた」には平成30年度94.1%（平成29年度95.7%、平成28年度91.3%、平成27年度91.2%）、「課題研究を通して、考える力が身についた」には平成30年度97.3%（平成29年度96.2%、平成28年度93.3%、平成27年度93.5%）、「チームでの協同作業」は平成30年度97.3%（平成29年度98.8%、平成28年度95.88%、平成27年度94.1%）の肯定的な回答があり、それぞれ昨年度に引き続き、高い割合を維持、あるいは上昇する傾向が見られた。特に、「課題研究を通して、考える力が身についた」では、過去最高の97.3%の肯定的な回答が得られたのが成果である。また、年を重ねるにつれて上昇してきた「質問にきちんと答えることができた」の項目では、平成30年度83.5%（平成29年度80.5%、平成28年度80.4%、平成27年度69.0%）の肯定的な回答があり、指導する際の課題として挙げてきた「質疑応答力」についても、完成年度の今年度、過去最高の83.5%の肯定的な回答を得た。質疑応答での達成感を生徒の課題研究の取組と研究内容の深化の影響も受けていると考えられるので、この5年間の取組において、大きな成果を上げたと言える。「研究内容に満足」も平成30年度87.7%（平成29年度84.6%、平成28年度80.3%、平成27年度77.4%）、「全体として、達成感・満足感」は平成30年度93.6%（平成29年度90.6%、平成28年度86.6%、平成27年度83.3%）であり、それぞれ昨年度と比べて3.1ポイント、3.0ポイント上昇した。また、発表会に参加した1年生については、「発表会を有意義だと感じ、参加して良かったと感じる」において、肯定的な回答が平成30年度97.8%（平成29年度98.8%、平成28年度97.5%、平成27年度97.5%）、「今後自分が研究・発表する際の参考になった」は、平成30年度96.8%（平成29年度97.0%、平成28年度94.8%、平成27年度95.8%）となり、昨年度に引き続き、高水準を維持している。さらに、「発表者に質問し、有意義な意見交換ができた」には、平成30年度68.2%（平成29年度65.9%、平成28年度64.9%、平成27年度72.6%）の肯定的な回答があった。

なお、教員へのアンケートの結果、「自身の授業や学びへの考え方に与えた変化や影響」には、平成30年度67%（平成29年度73.0%、平成28年度70.0%、平成27年度93.0%）の肯定的な回答がでており、初年度に新たな取組を行い、高い数値を出した後、安定している。この5年間の探究活動の取組の中で、校内での理解・波及が着実に進んだと言える。

## （2）英語による課題研究発表会—SAGANO GLOBAL PRESENTATION—について

「アカデミックラボと課題錬成での活動を振り返って」というアンケートでは、「チームでの協同作業を通じ、ひとつのものを作り上げ、発表することができた」には、平成30年度97%（平成29年度96.4%、平成28年度95%）、「プレゼンテーション能力を向上させることができた」に平成30年度91.2%（平成29年度89.7%、平成28年度91.3%）が肯定的な回答をし、高い水準で維持できている。さらに、「伝えたい内容を英語でうまくプレゼンすることができた」には平成30年度79.3%（平成29年度77.1%）の生徒が肯定的な回答をした。これらの結果は、この5年間で、アカデミックラボからSAGANO GLOBAL PRESENTATIONに至るまでの課題研究活動がよりスムーズに進み、充実した取組になってきたことを示し、運営指導委員会でも非常に評価された。

## （3）評価等について

評価等の研究については、京都大学大学院教育学研究科との連携を行った。同研究科 楠見 孝教授、西岡 加名恵教授の指導を受けて、課題研究の内容や今後について協議した。定期的にSGHの取組に関わる生徒の変容を、本校及び京都大学大学院教育学研究科作成のアンケートで調査・考察しており、取組5年目を終え、課題探究学習の成果が明らかになった。研究指定後も学校全体で取り組んできた成果を他の教育活動に波及させ、また、他の高等学校にも普及させたいと考えている。

## （4）海外コラボレーション事業について

カナダ研修では、在モンテリオール日本国総領事館と連携を密に行うことにより、政府関係機関等への訪問も可能となるなど、年々内容が充実してきた。今年度、この取組を評価する企業から支援がいただけることとなり、研究指定後もさらに内容の充実を図っていきたい。参加した生徒は多様な文化や考え方に触れ、地球規模の視野で考える機会を持つことができた。

一方、アメリカ研修では、昨年度から新たにモリカミュージアムで日本の文化・社会について英語でプレゼンテーションを行い、ホストファミリーと一緒に日本庭園を見学する等の取組を行った。また、現地の交流校であるフロリダジュピター高校は、平成28年に来日して本校との国際ワークショップを実施したほか、平成30年度にも来日しており、双方向での交流を進めることができた。

上記の事業に加えて、京都府教育委員会が実施する平成30年度府立高校海外サテライト校事業では、アメリカフロリダ州及びオーストラリアクイーンズランド州に約4ヶ月間の日程で代表生徒を派遣している。本校からは、アメリカ中期留学に1名、オーストラリア中期留学に7名が参加し、3名が留学を修了、5名が留学中である。

留学を修了した生徒3名については、3学期始業式において全校生徒向けに留学報告を行った。身近な存在から海外での経験を直接聞くことにより、特に下級生にとっては次年度の事業参加に向けて大きな刺激となったものと思われる。

## （5）校内体制について

平成26年度に発足した新教務部（教務部・研究開発部・教育推進部を教務部一つに統合し、その中にSGHプロジェクトチームを置く形）も5年目を迎えて定着してきており、事業毎に学校全体で動き・点検するという全校体制でSGHを推進してきた。一昨年度から、保健体育科も課題研究のラボを担当し（今年度は「地域とスポーツ」を担当）、全教科体制で課題研究に関わることができた。

さらに、「KGSⅠⅡⅢ」をまとめる「KGSⅢ」の、「英語による課題研究発表会—SAGANO GLOBAL PRESENTATION—」は今年度が3回目となり、海外交流校の生徒や各国の外国人留学生であるTAを迎えて、英語によるプレゼンテーションと質疑応答を全生徒が行うという形や運営方法が定着した。生徒にとっても3年間の課題研究の集大成となる取組として強く意識されてきており、下級生にとっては3年生の成果に直接触れることのできる貴重な機会となっている。

## （6）運営指導委員会について

### ＜嵯峨野高等学校運営指導委員＞

稲盛 豊実（公益財団法人稲盛財団専務理事） 岡田 伸夫（関西外国語大学教授）

金 哲佑（京都大学大学院教授） 田原 義宣（嵐山保勝会常任理事・天龍寺宗務総長）

矢代 一（株式会社矢代仁代表取締役社長） 山下 泰生（株式会社堀場製作所理事）

・平成30年度第1回運営指導委員会（平成30年9月21日（金）実施）

・平成30年度第2回運営指導委員会（平成31年2月20日（水）実施）

## （7）意識調査

1年生～3年生対象に、第1回意識調査を年度当初（7月下旬から8月）に、第2回意識調査を2月に行った。SGH指定第3期生である3年生の1年次と3年次の変容を見ると、「SGHのプログラム、あるいはそれに類似する学校行事に積極的に参加している」と答えた割合が53.3%から60.0%へと6.7ポイント増加、「自主的に社会貢献活動や自己研鑽活動に取り組みたい」が70.7%から82.1%へ11.4ポイント増加、「新しいアイデアを得たり発見することができる」が71.9%から80.4%へ8.5ポイント増



加するなど、探究活動に対する意識が3年間で確実に高まってきているほか、自己の積極性や創造性、さらに社会に貢献したり自らを高めようという意識が高まったと実感している生徒が増加している。3年間にわたるSGH事業が、生徒の中に意識変革をもたらしていることが明らかである。なにより、「私は、自分に満足している」が43.0%から58.4%へ15.4ポイント増と最大の増加を見せており、SGHの取組が生徒の自己肯定感を大きく高めることに役立っている結果となった。これはSGH事業の特筆すべき成果といえる。

一方、過去5年間にわたる1年当初の状況を見ると、「将来できれば海外の大学に進学したい」と答えた生徒は平均13.7%と必ずしも高いとは言えないが、「将来海外の大学へ留学したい」が44.8%、「国際化に重点を置く大学へ進学したい」が62.7%、「将来、仕事で国際的に活躍したい」が60.8%となっており、生徒が海外での経験や活躍を強く意識していることがうかがえる。それが学習姿勢にも好影響を与えており、「英語学習に積極的に取り組んでいる」は85.9%という高い数値となっている。

### (8) SGH中間評価の指摘事項

SGH中間評価においては、各種取組の学習効果や研究の進行については良い評価を得たが、「KGS以外の科目における指導について、どのような変容があったのかについても評価していくことが必要である。」との指摘があった。

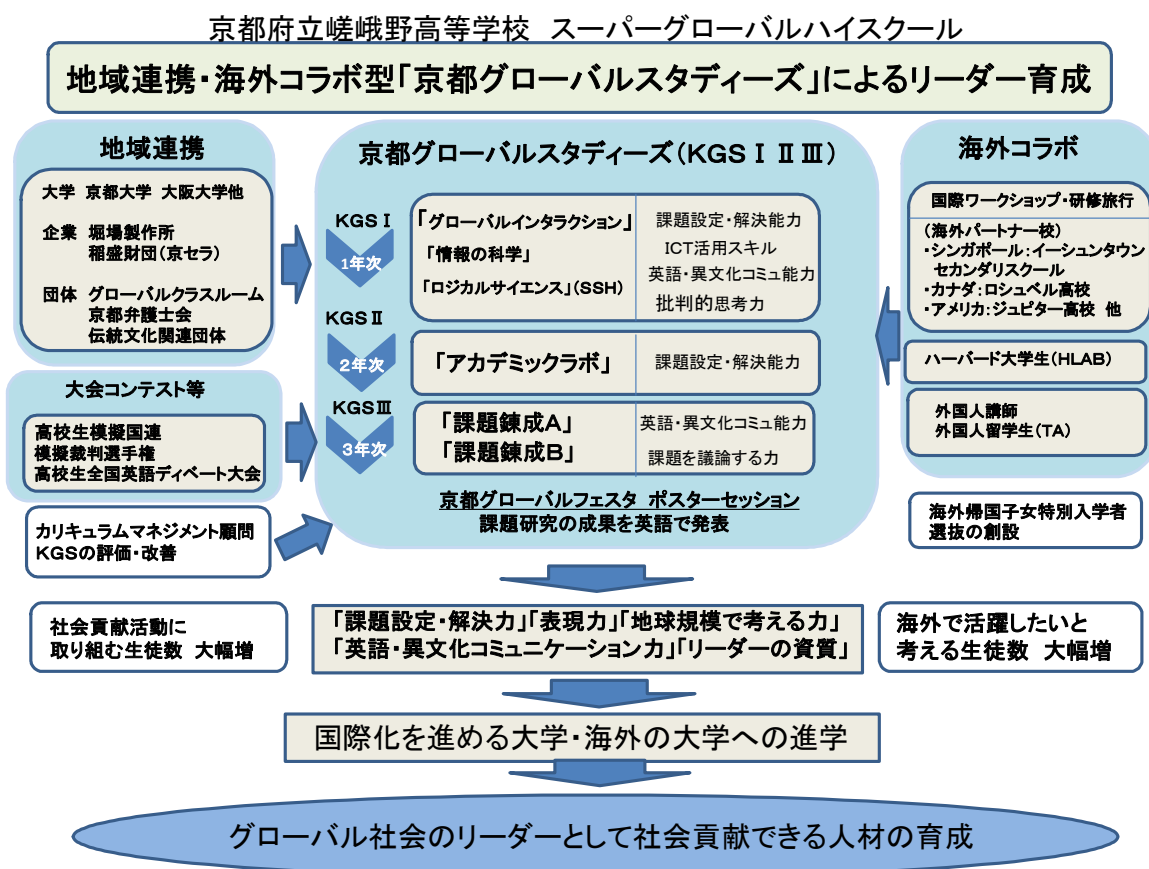
この中間評価の指摘を受け、教科主任会議や授業参観などを通して教科横断的で主体的・対話的な深い学びが実現できるよう授業改善に取り組んだ。

また、全生徒・全講座対象で年2回実施している生徒授業アンケートにも、昨年度から「アクティブラーニングなどの授業形態の工夫があるか」の設問を追加し、学校全体の平均と各講座の平均を教員個人にフィードバックすることで、SGH事業の普及を促進した。その結果、今年度の生徒アンケート結果については、4～1の4段階評価で平均が3.17（1回目）から3.20（2回目）と向上が見られた。

また、今年度のシンガポール研修においては、学年主導のホームルーム活動の取組として、シンガポールについての探究活動を行った。フィールドワーク探究発表会を実施したほか、フィールドワーク探究活動レポートを作成した。このように、授業だけでなく様々な教育活動において、課題研究に取り組むことのハードルが生徒・教員とも低くなっているのは、KGSの活動を通し、全教員の意識が変化した結果であると言える。

## 8 5年間の研究開発を終えて

### (1) 教育課程の研究開発の状況について



平成26年度入学生から教育課程の中に京都グローバルスタディーズ（以下KGS）ⅠⅡⅢを設置し、1年次に「社会と情報」（平成28年度から「情報の科学」に科目変更）・「グローバルインタラクション」（GI）・「ロジカルサイエンス」を設置し、課題探究活動の基礎力（英語コミュニケーション力、ICTスキル、批判的思考力・課題設定・解決力）を養成し、2年次の課題探究「アカデミックラボ」にスムーズに移行させた。「アカデミックラボ」では、人文科学、社会科学、国際関係・英語、自然科学の4つの領域に開講された17のラボから興味関心に応じて希望するものを選択する。そして生徒自身が課題を設定し、その課題の解決・改善に向けて探究活動を行い、その成果を「アカデミックラボ課題研究発表会」でポスター発表する。3年次には、「アカデミックラボ」で行った課題研究を「課題錬成A」「課題錬成B」の中で、英語でのプレゼンテーションに挑戦し、SAGANO GLOBAL PRESENTATIONで、内外に発表・提言した。教育課程に関していただいた文部科学省の中間評価は以下の通りである。

「中間評価」

○全体として各種の学習活動が豊富に設定されており、それらが相乗的な効果を生み出していると評価できる。  
○研究開発の内容の年次進行が適切に進められている。

特に、3年次の「課題錬成」においては、当初、英語スライドプレゼンテーションまで行う上級コースを「課題錬成A」、英語ポスター発表を行う標準コースを「課題錬成B」と想定して設置したが、対象生徒240名あまりの全員を「課題錬成A」の英語スライドプレゼンテーションをゴールとして指導を行ったので、「課題錬成B」は不開講となった。それ以外は当初の教育課程からの変更もなく、非常にスムーズに進んできた。2年次には、アカデミックラボ課題研究発表会を開催し、研究内容を日本語のポスターで発表し、3年次には、SAGANO GLOBAL PRESENTATIONにおいて、海外交流校生徒・教員、TA（海外から日本へ留学している大学生）、大学教員等・全国のSGH校教員、本校教職員、保護者、在校生に対して英語によるプレゼンテーションを行い、質疑応答を行った。この実践からもわかるように、この5年間の取組の中で、新学習指導要領の「総合的な探究の時間」に繋がる教育課程を開発し、それに関連する学校行事を校内に定着させられことは大きな成果と言える。

## （2）高大接続の状況について

本校は今年度の3年生の年度当初の進路希望が全員国公立大学であったように、例年国公立大学進学希望者が非常に多い。希望進路の実現という観点から、平成26年度から平成29年度卒業生の国公立大学の合格状況の推移を見ると、現役の合格件数・進学者数ともに、SGH対象の平成28・29年度が、SGH対象でない平成26・27年度を上回っている。

これまでの進路学習や社会人講師活用事業での大学教員による講演等の取組に加えて、アカデミックラボなどで直接自分達の研究課題について大学の教員にアドバイスを求めたり研究室を訪問するなどの経験を多く積むことで、進路目標が身近なものに感じられ、希望進路の実現により積極的に取り組めるようになったと考えている。

また一方で、SGHの教科横断的な探究活動の経験が、高等学校での学びの経験などを評価する国公立大学の特色選抜などで評価される可能性を探ってきた。この5年間で東北大学1名、北海道大学1名、さらに、今年度は1名の生徒が京都大学の特色入試に合格した。今年度の合格生徒はSGH事業であるフロリダ研修での体験を元に出願書類を作成し口頭試問に臨んでおり、SGH活動の特色入試等での有効性が確認できたので、SGH指定終了後もこれらのノウハウを活用していきたい。

本校では、大学の単位履修制度などは設定していない。地域に多くの大学があり、また、生徒の進学する大学も全国に広がり多様であることから、協力体制にある大学の単位を履修してもその大学に進学するとは限らず、実現にはハードルが高いためである。大学コンソーシアム京都が加盟大学間で単位互換制度を行っており、それらと連動して京都府内のどの大学に入学しても単位として認められるような取組は可能性を探っていくたい。

種別 \ 年度	H29	H28	H27	H26
国公立大学合格件数	245	220	197	186
国公立大学合格件数(現役)	170	174	154	148
国公立大学進学者数	158	146	139	130
私立大学進学者数	101	82	111	120

全8クラスの数値(内SGH対象6クラス)

## （3）生徒の変化について

### ア グローバルインタラクション (GI)における生徒の変化

スピーキング能力の伸長とスピーキングに対する意識の変化について(Conversation Test, All Englishでの授業の効果)

初年度の平成26年度の取組から、4技能の伸長のうち、最も生徒が伸びを実感しているのはspeakingであり、下記の調査結果から、年間を通して行ったConversation TestとAll Englishでの授業がその伸長を大きく促した要因と考えた。Conversation Testとは、生徒2人がその場で提示されるトピックについて、それぞれが規定の時間を話した後、今度はお互いの述べたことについて、フリーディスカッションを行い、その一連の内容を教員が評価するというものである。

(初年度 平成26年度)

(1) 「Conversation Testについてどう思いますか」という質問に対して、「大変良い学習方法だと思う」「良い学習方法だと思う」と回答した生徒は、95.3%であった。

(2) また「プレゼンテーション、ポスターセッション、Conversation Testのうち、英語コミュニケーション能力を身に付けるのに最も役に立ったと思うのはどれですか」という質問に対し、Conversation Testと回答した生徒が最も多く、68.3%であった。

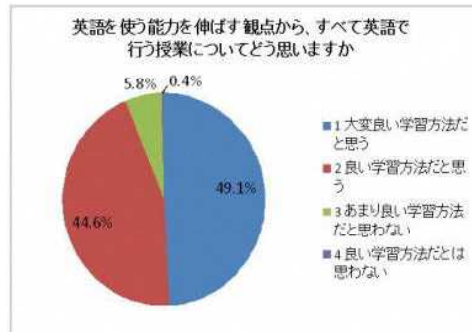
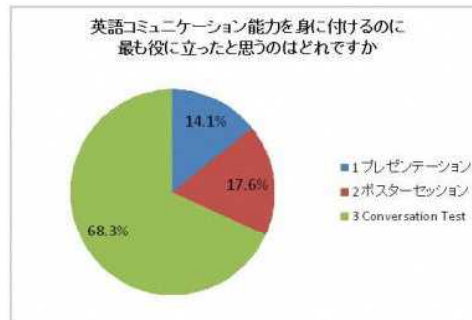
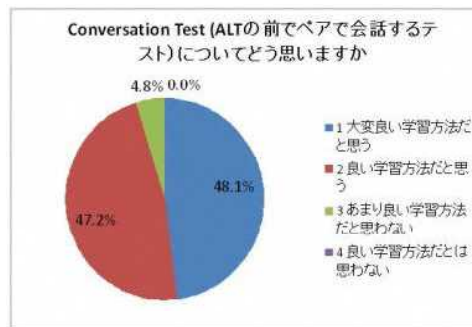
生徒の主な感想は次の通りである。

- お互いに質問し合うので頭の中で思いついたことを即座に英語で話す訓練になった。
- 英語を聞く、話す、伝えるなどいろいろなことが必要になるので良い練習になる。
- 英語の能力が上がるし、コミュニケーション能力もつく実践的なものだと思う。
- 「どうすれば相手に伝わりやすいか」を考えて英語力を鍛えることができた。
- 英語で話すのが楽しいと思えるきっかけになった。
- 人とコミュニケーションを取ることが英語を学ぶ上で一番大切だと思うから、大変良い学習方法だと思う。
- リアルな英語力、会話表現力が身についた。

(3) また「英語を使う能力を伸ばす観点から全て英語で行う授業についてどう思いますか」という質問に対して「大変良い学習方法だと思う」「良い学習方法だと思う」と答えた生徒は93.7%であった。

(4) 上記の結果に加えて、All Englishでの授業についての主な感想は次の通りである。

- 聞き取ろうと必死になることである程度わかるようになった。
- 授業を終えた後もつい反射的に英語がでてしまうことがよくあった。
- 自分の考えていることを伝えるために工夫して話す態度が身についた。
- 自分の英語能力が伸びているのを実感できた。



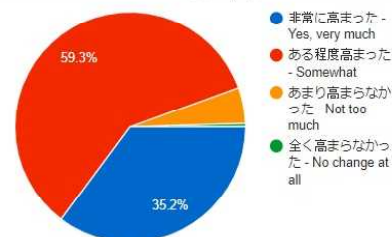
上記のような初年度の結果を踏まえて、平成27年度以降、All Englishでの授業を継続し、その中にCommunication Testを効果的に用いて指導を行ってきた。

平成27年度から29年度にかけての調査において、パフォーマンス・タスクを通して英語の4技能(speaking, writing, reading, listening)において「非常に高まった」「ある程度高まった」と回答した生徒の推移は、それぞれ右の表のようになった。4技能の中でも、特にSpeakingとListeningのスキルが伸ばしたと生徒が自覚しており、その数値も上昇している。

	Speaking	Writing	Reading	Listening
平成27年度	88.1%	77.9%	73.2%	85.6%
平成28年度	84.3%	82.1%	83.9%	92.1%
平成29年度	90.6%	87.3%	81.3%	89.0%

最終年度の平成30年度においては、右のグラフからもわかるように、この授業での活動を通して英語を積極的に使おうとする意識を高めることができたと答える生徒が85.5% (平成29年度86.4%、平成28年度90.4%、平成27年度85.5%、平成26年度84.1%)となり、この5年間を通して、生徒の英語に対する積極性が高まり、高い水準を保てたといえる。

3. 英語を用いて積極的に活動しようとする意識は高まりましたか。



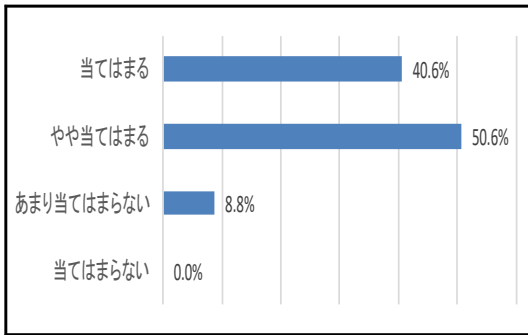
イ アカデミックラボにおける生徒の変化

教育課程上、2年次に実施する「アカデミックラボ課題研究発表会」直後に全生徒にアンケートを行い、生徒の力の伸長を調査してきた。

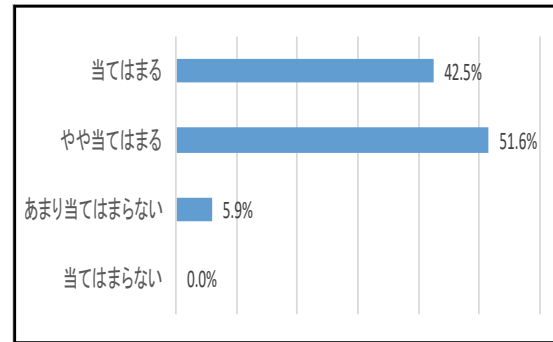
**(課題設定・解決力)**

自分たちで主体的に考え、課題を設定し、研究していくことができた。

(初年度 平成27年度)

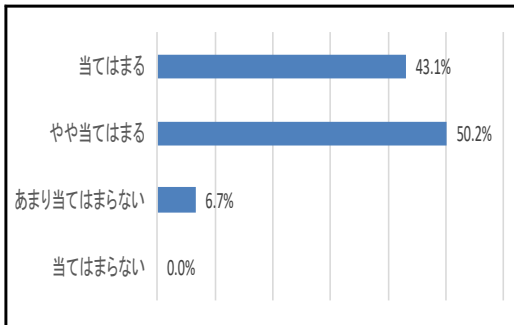


(最終年度 平成30年度)

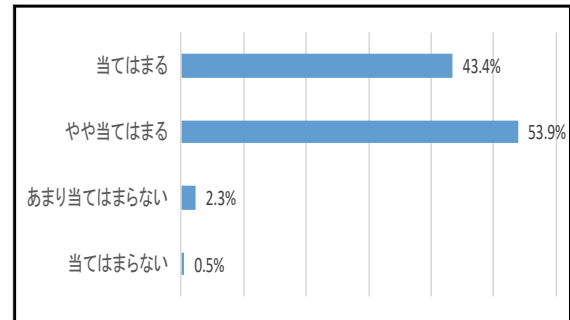


課題研究を通して、考える力を身につけることができた。

(初年度 平成27年度)

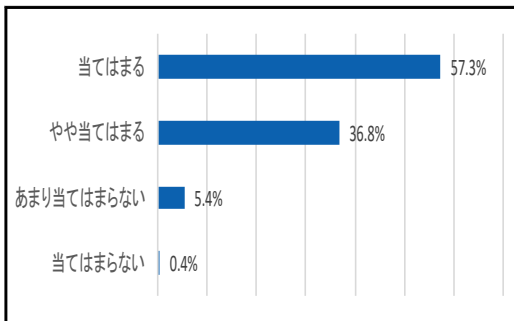


(最終年度 平成30年度)

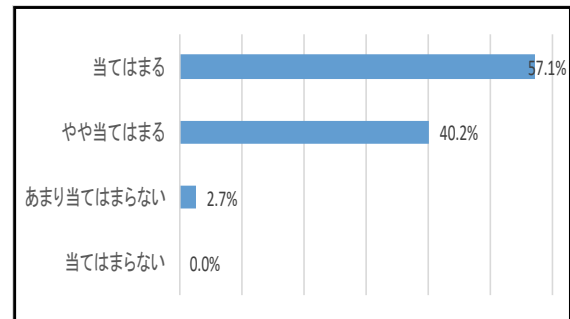


チームでの協同作業を通じ、ひとつのものを作り上げ、発表することができた。

(初年度 平成27年度)

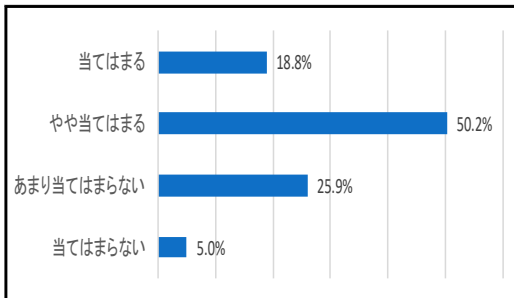


(最終年度 平成30年度)

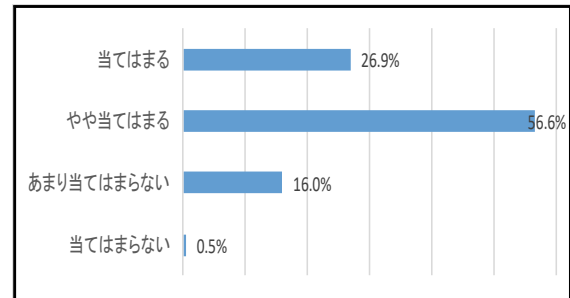


質問にきちんと答えることができた。

(初年度 27年度)



(最終年度 平成30年度)



上記のように、「自分たちで主体的に考え、課題を設定し、研究できた」には平成30年度94.1% (平成29年度95.7%、平成28年度91.3%、平成27年度91.2%)、「課題研究を通して、考える力を身につけることができた」には、平成30年度97.3% (平成29年度96.2%、平成28年度93.3%、平成27年度93.3%)、「チームでの協同作業」は、平成30年度97.3% (平成29年度98.8%、平成28年度95.8%、平成27年度94.1%)の肯定的な回答があり、それぞれ高い

水準を維持する傾向が見られた。また、平成28年度に大幅に上昇した「質問にきちんと答えることができた」の項目では、平成30年度83.5%（平成29年度80.5%、平成28年度80.4%、平成27年度69.0%）の肯定的回答があり、一昨年度11.4ポイントの大幅な上昇がみられた状態が今年度さらに3.0ポイント上昇している。本校の課題探究の指導において、重要項目として挙げていたのが質疑応答力の育成であるので、5年間の取組において大きな成果であると言える。「研究内容に満足」も平成30年度87.7%（平成29年度84.6%、平成28年度80.3%、平成27年度77.4%）、「全体として、達成感・満足感」は平成30年度93.6%（平成29年度90.6%、平成28年度86.6%、平成27年度83.3%）であり、それぞれ3.1ポイント、3.0ポイント上昇している。「うまくプレゼンできた」は、平成30年度88.6%（平成29年度84.2%、平成28年度87.5%、平成27年度81.5%）で、昨年度よりは若干の上昇が見られた。限られた時間の中で発表の準備を行う中で、同じく研究指定科目であるGlobal Interactionの手法のポスターセッションを練習に取り入れることで、この5年間の取組を活用して、効果的なプレゼンを模索してきたことも、上記の改善の一要因となっていると考えられる。

## ウ 卒業生の変化

平成28年度卒業生と29年度卒業生を対象にSGHでの学びについて調査を行い、以下のような結果であった。

### （高校時代に伸ばしたと思われる力）

平成29年度卒業生のトップ3

- ① 英語によるコミュニケーション力
- ② 課題探究力
- ③ 論理的思考力

平成28年度卒業生のトップ3

- ① 自主性
- ② 課題探究力
- ③ 好奇心／国際感覚

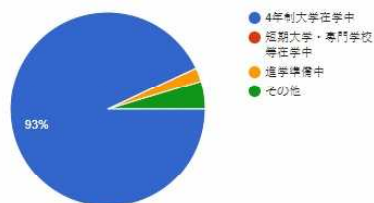
上記は、平成28年度卒業生57名と平成29年度卒業生87名の回答から得られたものであり、課題探究活動を行った成果があったと言える。また、以下にその他の質問に対する回答を記した。現在海外への留学を実際に行っている卒業生からの回答は得られないため、海外大学進学や将来海外の企業で仕事をしたいという項目の数値はあまり高くない。だが、自由記述の意見も含めて、高校時代のSGHの学びが大学での学びに着実に繋がり、課題探究力、コミュニケーション力、協働する力、思考力等を高めていることがうかがえる。

### （SGH第一期生と第二期生対象の調査結果）

平成28年度卒業生（第一期生以下同じ）

問2 現在の状況を選んで下さい。

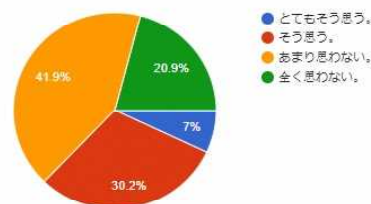
43 responses



平成28年度卒業生

問3 あなたがアカデミックラボで行った課題研究は大学での専門分野を決めるのに役立ちましたか。

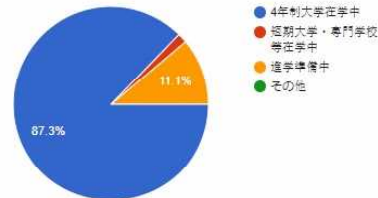
43 responses



平成29年度卒業生（第二期生以下同じ）

問2 現在の状況を選んで下さい。

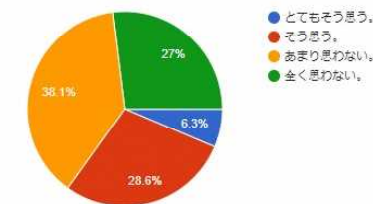
63 responses



平成29年度卒業生

問3 あなたがアカデミックラボで行った課題研究は大学での専門分野を決めるのに役立ちましたか。

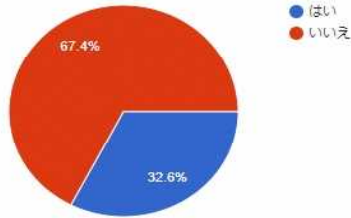
63 responses



平成28年度卒業生

問4 あなたは大学入学後に海外留学、又は海外研修に行きましたか。  
(あるいは、行く予定がありますか。)

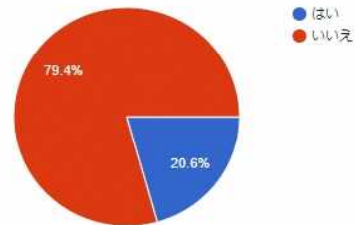
43 responses



平成29年度卒業生

問4 あなたは大学入学後に海外留学、又は海外研修に行きましたか。  
(あるいは、行く予定がありますか。)

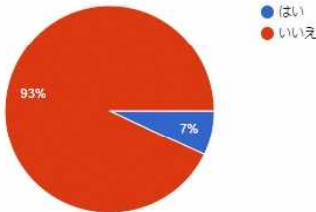
63 responses



平成28年度卒業生

問5 将来、海外の大学への進学や海外での就職を考えていますか。

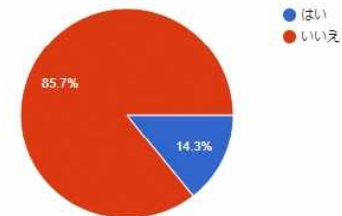
43 responses



平成29年度卒業生

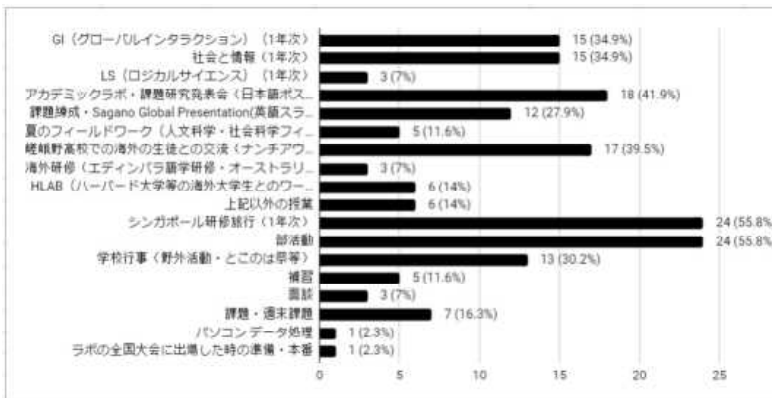
問5 将来、海外の大学への進学や海外での就職を考えていますか。

63 responses

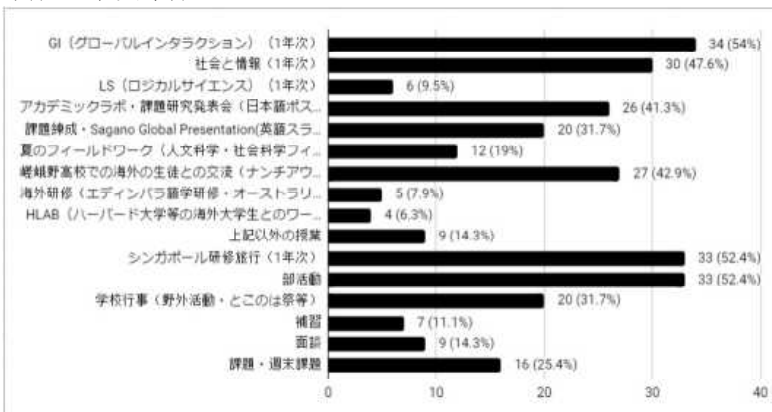


「高校在学中に経験したことで、卒業後に役立ったことを以下から挙げて下さい。」

平成28年度卒業生

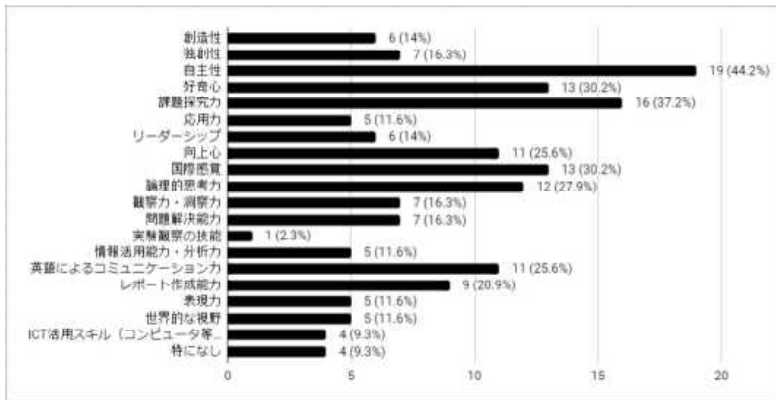


平成29年度卒業生

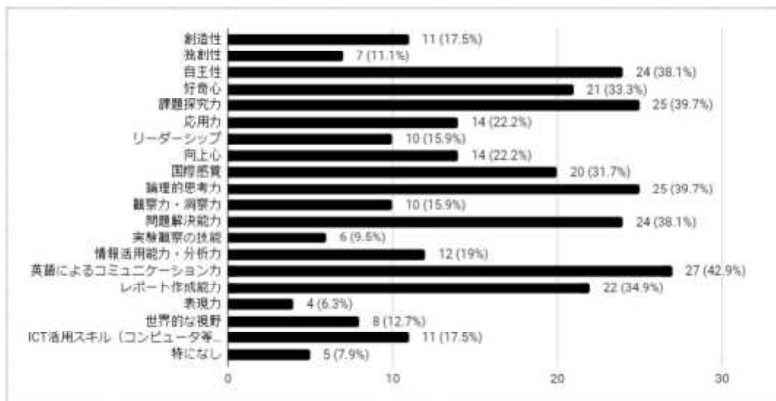


「あなたが高校時代に伸ばしたと思われる以下の技能・能力・態度等で、現在役に立っていると思われるものを挙げて下さい。」

平成28年度卒業生



平成29年度卒業生



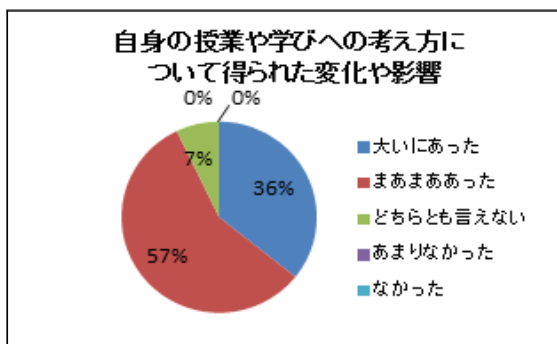
#### (4) 教師の変化について

教員が課題探究活動を指導する中でどのように変化するかについて、2年次の「アカデミックラボ」担当教員を対象にアンケート調査を行った。

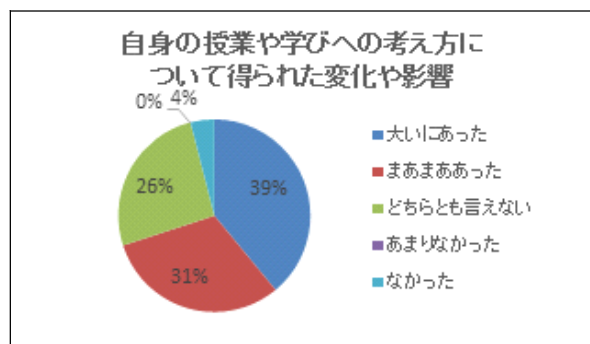
担当教員の回答

「自身の授業や学びへの考え方について得られた変化や影響」

平成27年度 (アカデミックラボ初年度)

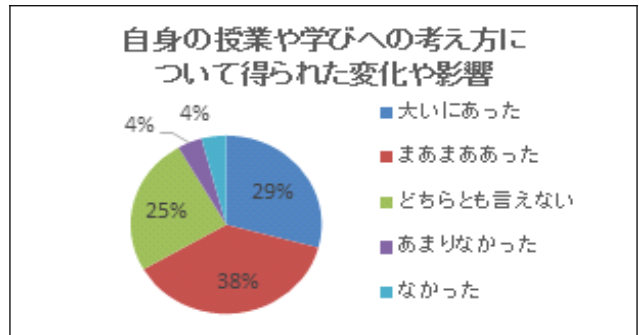
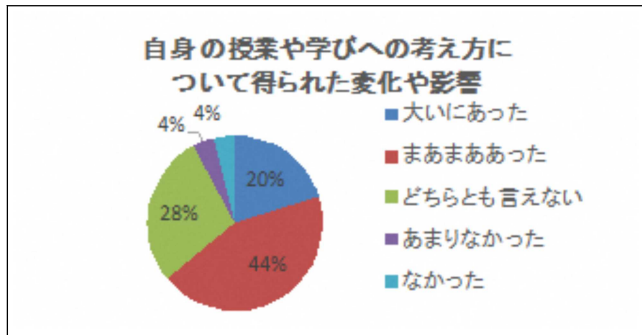


平成28年度



平成29年度

最終年度 平成30年度



上記のように、「自身の授業や学びへの考え方について得られた変化や影響」には、平成30年度67%（平成29年度66%、平成28年度70%、平成27年度93%）の教員が肯定的な回答をしており、この5年間の研究活動において、初年度の大きな意識改革以降、課題研究の取組が教員の授業や教育活動に継続して影響を与えてきたことがわかる。アカデミックラボ実施初年度のインパクトが非常に大きく、数値としても非常に高い。担当者の入れ替わりはあるが、8割の教員は継続して担当しているため、2年目（平成28年度）以降の数値が一旦下降し、そのまま安定しているのではないと思われる。SGH校として課題研究の指導で得たことが校内の様々な他の教育活動に影響を与え、特に教員の授業への意識に大きな影響を与えたことが成果であるといえる。

KGSが他の科目の指導に影響しているかを評価するため、全生徒・全講座対象で年2回実施している生徒授業アンケートに、アクティブラーニングなどの授業形態の工夫があるかの設問を昨年度から追加した。その結果、座学の授業でも一斉講義だけではなく授業形態が工夫されているとの生徒の評価は、今年度だけでも3.17（1回目）から3.20（2回目）と向上が見られ、教員間でKGSの影響を受けた授業の実践が進んでいることが分かる。

#### （5）学校における他の要素の変化について

SGHに取り組んだ5年間で、外部関係機関等・大学との関係がさらに深化した。日本政策金融公庫、京都弁護士会教育委員会、茂山狂言会、京つけもの「西利」、宇多野ユースホステル、嵐山保勝会、堀場製作所、Shimazuコーポレーション、シャチハタコーポレーション、京都市交通局、京都バスやNGOをはじめ、京都大学、大阪大学、京都教育大学、京都市立芸術大学、同志社大学、立命館大学、関西大学、京都学園大学、嵯峨美術大学等が主立った連携先であり、生徒の探究活動に関して多大な支援をいただき、学校がより地域社会に開かれたことも大きな成果である。

さらに、海外の交流が広がり、その結びつきが深まった。現在相互交流を行っている学校が、シンガポール共和国のナンチアウハイスクール、イーシュンタウンセカンダリースクール、ハイシンカトリックスクール、米国フロリダ州のジュピターハイスクールの4校となり、訪問交流を受け入れている学校は、先ほどの4校に加えて、韓国の韓一高校、シンガポール共和国のアングロチャイニーズ校の2校である。来年度にはさらにインドネシアの複数校と交流をスタートする予定である。SGH以前と比較して、海外交流校の数は倍増した。

校内の施設内にも、「数学おもしろボード」が登場し、休み時間や放課後に「数学おもしろボード」の前に生徒が集まり問題に取り組む姿や、図書館が大きくリニューアルされ、生徒の探究活動を支援する書籍がSGH予算で整備された。時には生徒の提案で図書館の展示レイアウトが変更されたり、探究活動の内容が展示されたりするようになった。

この5年間で、日本全国から数多くの学校訪問（平成30年度は18校）を受け入れてきた。その中で、SGH校としての取組に限らず、本校の特徴的な教育活動を伝え、その効果やノウハウを全国に普及させてきた。

毎年保護者対象に実施している学校アンケートでは、「グローバル人材育成のための海外校との交流等、国際的な取り組みが行われている」という項目について「そう思う」「おおむねそう思う」という肯定的意見は、平成26年度93.9%→平成27年度88.0%→平成28年度88.0%→平成29年度91.3%→平成30年度93.4%と推移している。SGHの初年度は保護者にもインパクトが強く、期待度が高かったが翌年から落ち着き、高い水準ながら年々評価が高くなっている。あわせて、「学校では、スーパーサイエンスハイスクール（SSH）・スーパーグローバルハイスクール（SGH）校として特色ある教育活動が行われている」という項目についての変化も平成26年度95.1%→平成27年度85.4%→平成28年度85.4%→平成29年度89.2%→平成30年度90.3%と同様の動きを見せている。

#### （6）課題や問題点について

今年度は研究指定最終年度であり、5年間の取組の中で次の点が課題であったと考えている。

##### ア 各取組の評価について

研究指定を受け、KGS I II IIIを核として様々な教育活動を行ってきた。5年間の研究の中で、PDCAサイクルを適切に回し取組を常に進歩させるべく、生徒評価の重要性は初年度から意識していたところである。



グローバルインタラクシオンにおいては、英語4技能を活用したコミュニケーション能力測定のためのパフォーマンステストについてループリックを作成し、生徒・教員で共通理解を行い、評価を続けてきた。毎年改善を行いつつ進めており、さらに良いものにできると考えている。

また手探りの中で課題研究を行ってきたが、評価方法についても模索を続けた。アカデミックラボでは多様な分野にわたって多岐にわたるテーマの課題研究に対してどのような評価が適切か、5年間にわたり担当者間で検討を続けた。さらに、京都大学大学院教育学研究科との連携を行い、本校及び京都大学大学院教育学研究科作成のアンケートで定期的に調査を行ってきたが、有効な分析や考察の方法についてさらなる研究を続けたい。

SAGANO GLOBAL PRESENTATIONにおいては、全発表をビデオ撮影している。優秀な発表の記録のみならず、探究活動の指導・評価・発表指導等の改善においても活用を進め、より良い指導・評価を目指したい。

運営指導委員会などでも指摘を受けているが、適切な評価と生徒・教員の変容の可視化については、現在も課題として残っており研究が必要である。

#### **イ KGSの他の科目への影響について**

5年間のSGH事業を通して、生徒が体系的に探究活動に取り組んでおり、その成果は生徒に良い変容をもたらしている。しかし、中間評価でも指摘されているとおり、KGS以外の科目における指導にどのような変容があったかについての検証は十分とはいえない。

対話的な授業や、ICTを活用した授業は増えてきているが、SGH事業の影響に加えて、新学習指導要領の発表の影響も要因として考えられ、その詳細を分析することは難しい。

ただ、今年度のシンガポール研修において、学年主導のホームルーム活動の取組として課題研究が行われ、フィールドワーク探究活動発表会の実施やフィールドワーク探究活動レポートの作成がされたことは、探究活動が全教員に浸透していることを示すものであるといえる。

#### **ウ 事業成果の普及について**

5年間の研究成果を他校にも普及する活動として、課題研究発表会の公開、グローバルネットワーク京都校（9校）との合同実践（HLAB、交流会等）、学校訪問の受け入れなどを積極的に行ってきた。また、幼・小・中学校など他校種との「縦のつながり」については、近隣の小学校の校長に学校評議員として参加してもらい、SGH事業の活動を紹介している。研究指定後も他校種への普及を促進していきたい。

#### **エ 海外留学・海外進学希望者の増加について**

短期留学に参加した生徒の内、具体的に海外の大学への進学を希望している生徒は少数にとどまっているが、半数の生徒は海外で働くことを意識するようになったと答え、9割以上の生徒が大学在学中にも留学することを希望しているなど、短期間の経験であっても海外へ視野を広げる大きなきっかけとなっていることがうかがえる。中期留学参加生徒については異文化への深い理解や多様な視点を獲得するなど、より大きな成長を見せており、海外大学への進学を決意する生徒もあらわれた。

このようにSGHの取組で海外への意識は高まっており、将来の進路を見据えて国内の大学に進学してから海外大学に留学を希望する生徒が大多数に上った。一方で、海外大学に進学した生徒は5年間で3名にとどまっている。昨年度までが1名進学で、今年度が2名進学予定と増加の傾向は見られるので、生徒の進路希望に添いつつ、海外進学に関する情報提供やノウハウ等を蓄積していくことで、海外進学希望者の支援を行いたい。

#### **(7) 今後の持続可能性について**

これまでのSGH事業で実施してきた様々な取組によって得られた成果は、大変有効な教育効果を生み出していると中間評価でも指摘されている。また、様々なノウハウがこの5年間の丁寧な教職員間の情報共有と真摯な話し合いの中で蓄積されており、生徒の発想や活動もスケールの拡大が見られる。また、これまで丁寧に培ってきた海外の学校との交流関係も信頼を高めており、本校の国際教育についての大きな財産となっている。これらの成果を決して無駄にせず、本校のみならずわが国全体の教育に役立て、これまでの研究開発を持続させることは本校の希望であり、使命であると認識している。

本校ではSGH事業で実施した教育課程については、来年度の入学生にも提示しており、今後もKGS I II IIIの実施を決定している。

事業の終了後は、これまで潤沢に事業予算を活用していたTAやアカデミックラボの活動費などについて、ボランティアや外部団体の寄付などを活用し、工夫しつつ継続していく予定である。また、アカデミックラボは本校教員の多くを指導者とすることで実現でき、かつ成果が上がってきた面があり、これからも指導力向上・人材育成の観点からも多くの教員による取組としていきたい。

管理機関からは、これまで研究を進める上で様々な形で適切な指導や多大なる支援を受けており、これなくしてはこの5年間の研究の成果は為し得なかったと言える。したがって、管理機関の支援体制が今後の取組の継続についても大きな影響力を持つと考える。今後も管理機関から適切な指導・助言を受けながら連携してより良い先進的な教育を実践していきたい。

国際交流事業については、SGH研究指定が終了した後、現在の取組をそのまま続けることは難しいものがある。その中で、必ず残さなければならない核となる取組を精査して、これまでの財産と信頼を維持発展させていきたい。特に、相互交流校との関係はかけがえのないものである。シンガポールへの

研修旅行はSGH指定前から実施しており、今後もシンガポールの学校との交流は継続予定である。フロリダの中期留学は、管理機関の事業として来年度も継続実施されることが決定している。本校独自のプログラムであるフロリダ研修については、国の補助金の活用や、管理機関が実施している「京都府母校応援ふるさと事業」により卒業生をはじめ広く府民に寄付を募るなど、様々な方策を検討している。

(6)で挙げた課題については、研究指定終了後も解決に向けて取り組みたい。

探究活動の評価については、今後、新学習指導要領の実施に向けて、全高等学校で課題となることが予想される。現在も来年度から探究活動を取り入れる予定の近隣府立高校の視察を受け入れているが、今後も引き続き本校が牽引役として先行研究を実施し、その成果を他校・他校種へ波及させていきたい。

SGH事業とSSH事業を通して全生徒が探究活動に携わっていることが、学校全体の雰囲気の良い影響をもたらし、一般科目の授業や他の教育活動においても生徒が主体的に活動する場面を多く目にするようになった。そういった個々の教員や教科・分掌等が行っている実践の共有を図り、全校体制での組織的な指導形態として定着させることで、KGSの他教科への波及が期待できる。

海外の大学へは今年度2名の生徒が進学を予定しており、これまでの取組の成果が表れてきている。今後も、管理機関の補助事業やトビタテ！留学JAPANなどの制度を最大限活用し、生徒が海外を体験する機会を提供することにより、留学成果を他の生徒へ波及させるとともに、海外進学に関する情報提供やサポートを進め、海外留学や海外進学への意識を高めていきたい。

以上により、これまでの取組を持続・発展させ、世界で活躍できるリーダーの育成を実現したい。